

〔書 評〕

J. ハーフ著

『保守革命とモダニズム』

——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治——

(中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子 訳)

中 道 寿 一

1

たとえどんなに単純明快に見える事象でも、それを一つの変数あるいは要因によってのみとらえることはできない。まして、ナチズムという巨大な事象を一つのあるいは一面的な要素によって分析しようとするれば、その本質を正しくとらえられないことはもちろんのこと、かえって、歴史の現実から手酷いしっぺがえしを受けるにちがいない。かつて、K.D. ブラッハーは、「国民社会主義（ナチズム）における伝統と革命」の中で、この点について、次のように指摘したことがある。すなわち、「ナチズムとは何か」を問題にする際、常に突き当たるのは、「ごく単純な定式で国民社会主義の位置づけの問題を解決しようとしたり、伝統か革命か、反革命か近代のか、即興か計画か、といった問題に対して一面的な解答を与えることを厳しく拒否する……国民社会主義の基本的性格」（早島英訳、『思想』1976年1月号、29ページ）であると。ここには、ナチズムを、アマルガムとしてとらえるか体系的にとらえるかの二極の間に踏みとどまり、対立する諸要素の「錯綜と結合の関係」を明らかにしようとする視点が含まれている。彼は、こうした対立する諸要素の中でも、とりわけ、「伝統的要素と革命的要素」を取り上げ、その「錯綜と結合関係の若干の具体例」として、(1)「国民的な社会主義の原理、即ち、労働者と国民国家の和解の原理」（傍線一筆者）、(2) 自由主義的・人間主義的理念のみならず伝統的なナショナリズムをも否定した、世界的革命原理としての人種論、(3) 保守的政治理論

にみあう社会ダーウィン主義が生きたイデオロギーに転化したときにもたらす革命性、(4) 社会構造を理解する際の「保守的文化ロマン主義と経済的・技術的進歩主義の独特の結合」、そして、この結合が最も顕著に見られるのは、(5) 「マス・メディアと大衆集会技術の近代的操作が、……伝統的・農耕ロマン主義的集会に応用された場合」や(6) ヒトラーの「ドイツ国民のゲルマン帝国」構想であることを、指摘している。さらに、この六つの事例の中でも、四番目の「保守的文化ロマン主義と経済的・技術的進歩主義の独特の結合」は、ナチズムの発展段階のどの場合どの領域でも見られる基調であるということ、そして、ナチズムのこうしたイデオロギー的基調は、「工業化と技術化の進展をロマン主義として賛美し、あるいは、『労働者』を新しい国民共同体の権化として称揚する時代の主要傾向」(傍点-筆者)に順応したものであることを指摘している。

ところで、この「時代」が、第三帝国期のみならず、それに先行するワイマル期も含むものであるならば、この時代状況を規定する概念の一つとして、「等価性の世界」(蔭山宏『ワイマル文化とファシズム』みすず書房)を用いることは可能であろう。「等価性の世界」とは、「ロマン主義的な個人的個人や市民社会の経済的個人の段階をも通りこした、いわば脱個人的段階の心的・精神的状況を示す用語」(102ページ)であり、「〈正当性意識〉が崩壊し〈中心〉たることを志向する力が成り立たない」ため「〈歯止め〉になるものが弱く、無原則的に……その場その時に応じて多くの力が意識空間に押し寄せ……ただ群居し相互に併存しているだけ」か、「たんに押し出されただけの瞬間的なかりそめの中心」をもつ極めて不安定な内面の秩序世界である。したがって、この「世界」における〈政治的なもの〉は、一方では「政治の技術化」「政治の即物化」として現われ、他方では「過剰イデオロギーの支配」として現われ、しかも、「この両極端の存在様式は、相互に排他的ではなく、むしろ同時に併存し、あえて言えば相互に補完しあってさえいる」(107-108ページ)。この「世界」こそ、トーマス・マンによって、「啓蒙主義の哲学的な主知主義と合理主義に反抗するロマン主義的反革命的民族」たるドイツ人の「危険な点」と指摘された、「たくましい時代即応性、能率的な進歩性と過去の夢との混合物、高度に技術化されたロマン主義」(『ドイツとドイツ人』青木順三訳、岩波文庫、32ページ)の世界であり、ここで取り上げる J. ハーフ『保守革命とモダニズム』の対象とする世界でもある。

2

本書は、その原題 Jeffrey Herf, *Reactionary Modernism: Technology, Culture, and Politics in Weimar and the Third Reich*, 1984. が示すように、対立する諸要素の結合、とりわけ、「鋼鉄のロマン主義」（ゲッベルス）と言われる「ドイツの内面性と近代テクノロジーの相互浸透」（T. マン）を「反動的モダニズム」としてとらえた点に特徴をもつ。それゆえ、まず、このキーワードを手掛かりに、本書の内容を、その構成にしたがって、順に要約してみよう。

「第一章 反動的モダニズムのパラドックス」では、本書の対象を、「ドイツの近代性が孕んでいた文化的パラドックス、すなわち、啓蒙的理性を拒絶したドイツの思想家たちがその一方では近代テクノロジーを受け入れたという事実」の検討に置き、そのための分析概念として、ドイツの保守イデオロギーの中から、「ドイツ・ナショナリズムの中に存在している反近代主義、ロマン主義、非合理主義の思想と、手段・目的合理性の最も明白な現れである近代テクノロジーとを和解させようとする考え」を抽出し、これを「反動的モダニズム」という理念型へと構成する。そして、このドイツ・ナショナリズムの「選択的受容」を核とする「反動的モダニズム」は、19世紀末ごろドイツの工科大学において始まり、ワイマル時代の「保守革命の中で非技術系の知識人たちによって擁護され」、「1920年代にはナチ党の中に、1930年代にはヒトラー体制の宣伝担当者たちのあいだに、安住の地を見出し、1945年に至るまで全体主義的イデオロギーの勝利に貢献する要因となった」という経緯が示され、したがって、「反動的モダニスト」とは、「みずからの国民的伝統の中から、このような文化的和解を可能にする要素を選び出したドイツのイデオロギーの主張者」と規定される。こうした主張には、ナチ・イデオロギーを「近代性に対する文化的・政治的反乱」ととらえる F. スターンや「ナチの反近代主義的イデオロギーと強い近代化促進傾向の不統一」を強調するシェーンボーム、「完全に啓蒙化された世界が災いをもたらす」とするフランクフルト学派への批判が含まれている。

「第二章 ワイマルにおける保守革命」では、反動的モダニズムの伝統に重要な貢献をなした思想として保守革命が取り上げられる。「保守」と「革命」という相反する概念を結び付けたこの右翼思想は、必ずしもドイツ固有のものではない。

しかし、思想の具体化・現実化に特殊性が伴うものであれば、保守革命のドイツの特殊性も存在する。ここでは、文明に対する文化の擁護、反ユダヤ主義よりも歴史的伝統・理念の優位、利益社会に対する共同体、経済に対する政治の優位、ドイツ的あるいは国民的社会主義が挙げられる。しかし、こうした思想をもつ人々が、すべて、「反動的モダニスト」ではない。「反動的モダニスト」として挙げられるのは、H.フライヤー、E.ユンガー、C.シュミット、W.ゾンバルト、O.シュペングラー、M.ハイデガー（一時的にのみ）であり、ファン・デン・ブルック、クラークス、E.ニーキッシュは除外される。その判断基準は、テクノロジー受容の可否である。「保守革命の枠内での反動的モダニストの功績は、テクノロジーを文明の領域から文化の領域へと移行させることによって技術を包摂する必要性に応じたことにある。そうすることによって彼らは、政治や文化において合理化する世界観を受け入れることなくテクノロジーを包摂することができた。その結果生じた技術崇拜は、……反テクノロジー的な風潮と同じ感情の激しさをもっていた」（傍線一筆者）。

「第三章 オスワルト・シュペングラー——ブルジョワの矛盾・反動的和解」では、シュペングラーの『西欧の没落』を、ロマン主義的で非合理的な感情と、技術的な進歩に対する熱狂との和解という視点からとらえる。シュペングラーにおいては、現代史の諸現象は「美しきドイツの魂の外在化した形態と象徴」ととらえられ、したがって、近代西洋のテクノロジーには特別の精神がある（ファウスト的テクノロジー）、ととらえられる。すなわち、彼は、テクノロジーの合理的な性質ではなく、テクノロジーの「本質的に非合理的でロマン主義的な『形而上学と神秘主義』」の点で、テクノロジーを擁護する、とされる。「『西欧の没落』は、文化的絶望の余すところのない目録を含んでいるが、その伝えようとするところは、諦念や郷愁ではない。……この書物は、絶望と希望の両方に満たされていた。希望は、第一次世界大戦後のドイツの反テクノロジー的雰囲気を取り除くという点にあった。それは、反資本主義的憤りから反工業的要素を取り除きながら、テクノロジーを反資本主義的憤りの重荷から解放するということによって達成された」（傍線一筆者）。

「第四章 エルンスト・ユンガーの魔術的現実主義」では、テクノロジーに関してシュペングラー以上に明確な態度を示す、いわば「極端な技術決定論者」としてのユンガーを取り上げる。彼は、第一次大戦の戦争体験を基に、テクノロジーこそ、「政治を美的なものにし、そのことによって文化的な退廃と衰退の危機を解決できる」「表面的な外見の背後で作用する神秘的な真実の力」とみなし、技術的進歩に

よる文化的再生を追求する。そして、その文化的再生の場としては戦争が、したがって、その再生の主体としては「鋼鉄の雛形」のような人間が想定される。この人間は、「男性的共同体、美的な明快さと形態、痛みを感じさせないほど機械化され、頑丈となった肉体というユートピア的考えを一つにしたもの」であり、戦争は、「火と血、精密さと熱情、合理性と魔術、外面的形態と隠された意志の見かけの上での無限の『統合』」と見なされる。ここでは、美醜が規範的判断となり、意志の崇拜が政治化され、意志とテクノロジーの併置によって「機械への本能的精神集中」がもたらされ、「技術的形態の超道徳的唯美主義」が成立する。しかも、彼にとって、テクノロジーは、中立ではなく、本来的に反民主主義であり、権威主義的である。したがって、「権威主義的テクノロジーは権威主義的国家を必要とする」。かくして、ユンガーは、「啓蒙思想の最大の業績に対する攻撃の中に、すなわち、自律的な個人に対する攻撃のなかに、技術の美しさを見出した」と結論される。

「第五章 テクノロジーと三人の大立者の思想家」では、M. ハイデガー、C. シュミット、H. フライヤーが取り上げられる。しかし、ハイデガーの場合、確かに、「脅かされている現存在を回復する」ため、一時、「ドイツはテクノロジーと文化とを結合させるといふ特別な使命をもつ」と考え、この使命の実現をナチスに期待したが、後、「真の現存在の回復は技術的進歩を停止すること」であり、「ナチズムは反技術的プログラムを追求していない」として、ナチスに幻滅し距離を置いたので、「反動的モダニストに入るわけではない」とされる。ただ、「彼がテクノロジーと協調できなかったという事実、あるいは、これを拒否したという事実は、反動的モダニストの達成した成果をより一層際立たせる」とされる。次に、シュミットの場合は、政治的ロマン主義に対する批判とその吸収、「決断主義」に基づく自由主義攻撃、「中立化と非政治化」の時代からテクノロジーを切り離そうとする社会的合理化過程に対する攻撃の点で、反動的モダニズムに貢献したとされ、彼にとって、「テクノロジーの精神は、ひとたび自由主義的・マルクス主義的な進歩と合理性の精神から切り離されれば、権威主義的政治との選択的親和力を有するもの」と指摘される。また、「右からの革命」を主張するフライヤーの反動的モダニズムへの貢献は、「テクノロジーと文化」というテーマを掲げ、ドイツ観念論やロマン主義を選択的に受容し、「工業社会」に反抗する「革命的」民族の政治象徴とテクノロジーの「行動主義的意志」とを結び付けた点に、したがって、「非合理主義的ではあるが近代的そのものといえる社会理論の相貌を与えたこと」に求められる。

「第六章 ヴェルナー・ゾンバルト——テクノロジーとユダヤ人問題」では、一方で、「野卑な資本主義をユダヤ人と同一視」することにより「反資本主義的憤懣を反ユダヤ的憎悪へと転換」させ、他方で、テクノロジーを、ユダヤ精神とは対照的な「ゲルマン的・ローマ的精神」の外在化したものととらえるゾンバルトが、テクノロジーを「商業世界の中で失われてしまった意味を与えることのできる非資本主義的あるいは反資本主義的な活動の守護者」と見なしたこと、したがって、テクノロジーを資本家による濫用と歪曲から救い出し、このテクノロジーによって経済をコントロールするような「権威主義国家」を求めたことが指摘される。

「第七章 イデオログとしてのエンジニア」では、エンジニアは政治に無関心であったという「シュペーア伝説」を否定し、「専門技術者の反資本主義」イデオロギー（カール・ハイント・ルートヴィヒによれば、テクノロジーはドイツ文化の深奥の衝動から生まれたという考え、近代ドイツ社会の全般的危機は私的な資本主義的利益による機械の濫用から起こったということ、国民共同体の繁栄は強力な国家によってのみ守られるということ、技術戦争時代においてエンジニアが中心的役割を果たさなければならないこと、の四要素から成っている）が存在したこと、したがって、エンジニアは同時にイデオログでもあったことが指摘され、エンジニア職内部における反動的モダニズムの起源と発展が示される。起源としては、ここでは、「エンジニアの全国組織の雑誌ならびにドイツの著名な工科大学の工学教授達によって提示された技術専門職に固有な伝統」と、「エンジニアや一本立ちの論客によって執筆された論文や著作」が取り上げられ、「ドイツ技師連盟」の『技術と経済』や「ドイツ工学士協会」の『技術と文化』、F. デッサウアーや E. チマーという大学教授、ディーゼル・エンジンの発明家の息子 O. ディーゼル、シュベングラーの友人 M. シュローター、そして、K. ヴァイエ、H. ハルデンゼット、M. ホルツァーというエンジニアや論客によって、自由主義的合理主義の網の目からテクノロジーが切り離され、ドイツの伝統文化の中に組み込まれていく過程が明らかにされる。

「第八章 第三帝国における反動的モダニズム」では、もう一つの「起源」たるナチ党が、とりわけ、「生産的資本と寄生的資本」とを区別する G. フェーダー、テクノロジーを「ポスト自由主義的でポスト唯物主義的な文化の自律的要因」とする P. シュベルパー、近代テクノロジーをアーリア的意志の表現と見、啓蒙思想を拒絶するヒトラー、テクノロジーを自覚的に肯定し、その内面を魂で満たし、統御

し、民族と文化に貢献させることをナチズムの主要課題の一つと見るゲッペルスが取り上げられる。そして、こうしたナチズムの「技術教育を犠牲にした政治・イデオロギー教育の優先」が技術革新の立ち遅れやドイツ経済・軍事目的への重大な損失をもたらしている、という H. シャハトの警告は無視され、フォルクス・ワーゲン車、アウト・バーン、空軍等すべて「ナチ技術の範型」とする「ドイツの技術」の称揚が第三帝国期の最後まで行なわれたと指摘される。すなわち、ナチスは、反動的モダニズムの伝統に、「制度的、宣伝的表現を与え、啓蒙思想の拒絶とテクノロジーとの両立可能性を主張するために、反動的モダニズムの伝統から言葉やメタファーを借用した」。しかし、反動的モダニズムの伝統は、「イデオロギー的熱狂の一部となり、その熱狂は、勝利を達成できる手段を欠如していたにもかかわらず、それを実現可能とナチスに確信させ、目的と入手しうる手段との戦略的調整を意志の言語にもとづく政治的賭けにおきかえた」と指摘される。

「第九章 結語」では、「反動的モダニズムは、産業革命とフランス革命のもたらす結果に直面した社会の普遍的ジレンマ、すなわち、いかにすれば国民的伝統は近代文化、近代的テクノロジー、近代的な政治制度・経済制度と和解しうるのかという普遍的ジレンマに対する特殊ドイツ的な回答であった」と要約され、また、「反動的モダニズムの伝統の主要なテーマ」として、テクノロジーについての美学的な見方の提示、テクノロジーを権力への意志の外在化と見る信念の表明、政治の優位にテクノロジーは不可欠という主張、テクノロジーと戦場体験の男性的共同体との結合、テクノロジーを特殊ドイツの産物ととらえる見方、特殊な使命を課せられたドイツのみが魂とテクノロジーを結合しうるという主張が挙げられ、この伝統を十分承知したナチスが市場利益による濫用からテクノロジーを解放し、それを国家に奉仕させる運動として登場した、と指摘される。そして、こうしたナチズム把握から、ナチズムを資本主義の変種ととらえ、そのイデオロギーを軽視するマルクス主義者や、「近代化しながら非合理主義にとどまる」点を理解できない近代化論者、また、フランクフルト学派の中でも、「ドイツ自由主義の弱さと自由主義の本質を誤解」したマルクーゼ、「ドイツの現象をヨーロッパ的現象としてのファシズム問題に一般化」したベンヤミン、ナチズムを「発達した独占資本主義に内在的な危機のドイツ的な変種」と解釈する F. ノイマン、アウシュビッツは啓蒙思想の真実、全体支配としての理性があらわになったものとするアドルノとホルクハイマーが批判される。とりわけ、アドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』は、次のよう

に批判される。「近代をアウシュビッツの偏光器を通して眺めたために、また、ブルジョア的な思想や社会のなかに含まれる対立や内在的な緊張を暴露することに慣れていたために、ホルクハイマーとアドルノは、マルクス主義や近代化論の理論家が見落としていたパラドックスを見た。しかし、彼らは、誤って、実際にはドイツの特殊な不幸の産物であったものを、啓蒙思想の責任に帰した。ドイツは、余りにも多くの理性、余りにも多くの自由主義、余りにも多くの啓蒙思想のために苦しんだのではなく、それらのどれもが十分に存在しなかったために苦しんだのである」と。

### 3

次に、以上のような本書の内容に対する評価を幾つか紹介しておこう。まず、本書の意義は、「20世紀の新しい技術の理念と、ドイツの民族共同体理念や固有の精神的経験の概念とを結び付けることのできた、ドイツ社会思想の一つの流れに注目」し、ヨーロッパ啓蒙主義の伝統からドイツ思想がどの程度逸脱しているかを明らかにした点にあるという評価 (James Joll, *Times Literary Supplement*, July 5, 1985, p. 744) や、本書のもつ新しい視点は、シュペングラーなどロマン主義的保守主義者による技術への対応を強調した点であり、「当時のヨーロッパの思想家たちに技術の与えた深い影響を取り扱った重要な研究は他に存在しない」という評価 (M. Chernov, *Choice*, July/August 1985, p. 1684)、また、「経験的に見て、同僚の科学者や技術者が、他の人々と比べて著しく合理的な行動を取るとは思わない。現在の技術信仰の風潮の中で、ドイツの事例は、社会全体の価値が混乱したときに起こりうることへの恐るべき警告」であり、その意味で本書は「極めて興味深い本」であるという評価 (Frank Field, *History*, Vol. 71, 1986, p. 335)、本書は、人間行動をその主観的意図から明らかにしようとするウェーバーの方法に基づき、「反啓蒙主義的世界観の恩恵を受けながら、技術を拒否していない」思想家たちの思想のみならず、「技術者による技術者むけの刊行物の注意深い分析」によって、技術インテリゲンチャーがどの程度「文化的ペンミズムやノスタルジアの政治と、機械の受容や美化とを和解させることができたかを示すことに成功している」(Lewis A. Coser, *American Journal of Sociology*, Vol. 91, 1986, p. 1496) という評価、さらに、本書が、政治事象を構造的要因から説明しようとするここ20年の流行に対し、「歴史学や社会学



が社会の一般的文化やその主たる観念体系を無視することなど断じて許されない」としてウェーバーを想起させてくれたことは「全く正しい」という評価（Gordon A. Craig, *The New York Review*, January 30, 1986, p. 23）などがある。しかし、他方、ナショナリズムを「結び糸」とした、「イデオロギー的熱狂と技術の効果的使用の結合」は、ワイマル期や第三帝国期のみならず、イランやイラク、リビア、中国などでも見られる現象であり、反動的モダニズム概念は、「西欧以外のモダニズムのジレンマに、……光を投げかけるもの」と評価しながらも、著者自身、反動的モダニズムは近代化に直面した社会の「普遍的ジレンマへの特殊ドイツの反応」と述べながら、「これらの文化的様式がドイツ以外の場所に現れるとしたら、それは近代へのドイツの道がヨーロッパ以外のところで再生産されたからである」と述べている点を指摘し、この概念の固有性と類似性が曖昧であるとしているもの（Paul Hollander, *The New Republic*, June 9, 1986, p. 38）、また、反動的モダニズム概念は、ユンガーとフライヤーには適合しても、シュペングラー、シュミット、ゾンバルトには必ずしも適合していないのではないかと、ほとんどのエンジニアや最大の技術者組織が、文化的危機に関与していなかったこと、右翼知識人やナチズムの中に矛盾したさまざまな流れがあったことを再考すべきであるとか、第三帝国における技術と文化の統合の影響力について議論の余地があるという意見（J. W. Bendersky, *The American Historical*, Vol. 90, No. 4-5, 1985, p. 1223）や、本書は、「反動的モダニズムには、この体制の悲惨な結末をもたらした戦略的な理性の無視や技術的革新の欠如に責任がある」ことを示そうとしているが、これは、「思想問題」の過大評価であり、「分析を思想から歴史事象や構造へと拡大する議論には十分な注意が必要である」という批判、また、本書は、アドルノやホルクハイマーは「近代ドイツ史をひどく誤解している」と述べているが、それは『啓蒙の弁証法』をドイツ史の解説書と誤解しているからではないのか、「本書は確かに、ファシズムと近代化の合理的な議論に重要な貢献をなすものであるが、アドルノやホルクハイマーの述べたより深い問題、西欧文明史上の中で直面する合理性と理性の問題を看過している」という批判（Herbert Mehrtens, *Technology and Culture*, Vol. 28, No. 1-2, 1987, p. 150）がある。

ところで、筆者は、ナチ党大会やヒトラー・ユーゲントの集会などで見られるあの「メカニカルな美」にこだわってきているが、本書は、この「メカニカルな美」を説明する貴重な手掛かりを与えてくれる。たとえば、反動的モダニズムは、「美

の観念を規範的標準へともちあげ、美の概念をエリート主義的な意志の観念に結びつけ、さらにテクノロジーを意志と美の具体化されたものと解釈することによって、テクノロジーを非合理主義的、ニヒリスト的に取り込むことに貢献した」という指摘や、この概念によるユンガーの「魔術的現実主義」に関する分析など見事である。その意味で、反動的モダニズムは、ナチズムを分析する有効な概念の一つであることに間違いない。しかし、そこには、「ヒトラーのイデオロギーがナチ体制を支える決定的な政治的事実」という基本認識があって、その「ヒトラーのイデオロギー」に内在する対立的諸要素の結合を体系的なものとして取り出し、その系譜を跡づけるとき、その説明は、単純化した分だけ、明快であり、切れ味は鋭い。だが、そのことが、逆に、上述のような批判を生む原因となっていないであろうか。そのことによって、本書が批判の対象とした論者たちの重要な論点、たとえば、ナチズムが民衆のルサンチマンをナショナリズムを媒介としてすくいあげイデオロギーに仕立てあげていくプロセスや、合理的理性の負の側面の問題など、看過ないし軽視されていないであろうか。また、イデオロギー分析の重要性を指摘する点は全く同感であるが、ナチズムを支えたイデオロギーや、ナチ・イデオロギー、ヒトラーのイデオロギーの区別の問題を含めて、「ヒトラーのイデオロギーがナチ体制を支えた決定的な政治的事実」という、しごくもっともに思えるテーゼに議論の余地はないであろうか。さらに、反動的モダニズム概念が、ワイマル期・第三帝国期のドイツのみならず、戦時期日本や現代の第三世界にも適応可能な、広い射程距離と有効性をもつという主張に異論はないが、この概念の背後に見え隠れする著者自身の「近代」観、あえて言えば、楽観的な「近代」観が気にならないわけではない。とはいえ、本書は、従来不分明であった、しかし、重要な諸観念を、技術との関係で、明晰に分析しえた得難い研究書であることに間違いなく、訳者諸氏の労を多としたい。

(岩波書店刊、1991年、四六判、443ページ)